

ジェントリフィケーションによる立ち退きをいかに捉えるべきか：
ジェントリフィケーションの定義・Marcuseの類型化・多様化するアプローチの検討

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪市立大学都市研究プラザ 公開日: 2020-04-26 キーワード (Ja): ジェントリフィケーション, 立ち退き, 間接的な立ち退き, 立ち退かされる人びと キーワード (En): Peter Marcuse, Gentrification, Displacement, Indirect Displacement, Displacees, Peter Marcuse 作成者: 松尾, 卓磨 メールアドレス: 所属: 大阪市立大学, 日本学術振興会
URL	https://doi.org/10.24544/ocu.20200420-005

Title	ジェントリフィケーションによる立ち退きをいかに捉えるべきか：ジェントリフィケーションの定義・Marcuseの類型化・多様化するアプローチの検討
Author	松尾, 卓磨
Citation	都市と社会. 4 巻, p.66-86.
Issue Date	2020-03
ISSN	2432-7239
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学都市研究プラザ
Description	
DOI	10.24544/ocu.20200420-005

Placed on: Osaka City University

[投稿論文]

ジェントリフィケーションによる立ち退きを いかに捉えるべきか —ジェントリフィケーションの定義・Marcuseの類型化・多様化 するアプローチの検討—

松尾卓磨 (大阪市立大学大学院博士後期課程 日本学術振興会特別研究員DC)

[キーワード] ジェントリフィケーション／立ち退き／間接的な立ち退き／
立ち退かされる人びと／Peter Marcuse

本稿ではジェントリフィケーションによって引き起こされる立ち退きに焦点をあて、ジェントリフィケーション研究の文脈においてそれをいかに捉えるべきかという点について検討している。最初に既往の研究で提示されてきたジェントリフィケーションの定義の整理を行い、ジェントリフィケーションが有する地域の社会的性格の上方的変容という本質的性格やジェントリフィケーションと立ち退きの関係性について確認を行った。また Peter Marcuse が 1985 年の論考において提示した最後の居住者に対する直接的な立ち退き、連鎖的に進行する直接的な立ち退き、排他的な立ち退き、立ち退きの圧力という 4 種類の立ち退きの内容を確認し、ジェントリフィケーション研究において Marcuse の類型化を参照することの重要性を指摘している。そしてジェントリフィケーションと立ち退きに関する先行研究や 2018 年から 2019 年にかけて発表された 5 つのレビュー論文を参考として、Marcuse による立ち退きの類型化が応用されている事例、関連する新しい視点やアプローチ、そして今後検討されるべき論点を整理した。

1. はじめに

ジェントリフィケーションと立ち退き displacement の関係性に焦点を置き様々な角度からジェントリフィケーション研究をレビューしている以下 5 つの論考が 2018 年から 2019 年にかけて相次いで発表された。

- ・「ジェントリフィケーションによる立ち退き」
(Zhang and He, 2018)
- ・「ジェントリフィケーション、立ち退き、公共投資の役割」(Zuk et al., 2018)
- ・「ジェントリフィケーションと立ち退き: 後期資本主義制下の諸都市における都市的不平等」
(Cocola-Gant, 2019)
- ・「立ち退きの測定と地図化: ジェントリフィケーションへの闘争における定量化の問題」

(Easton et al., 2019)

- ・「マルクーゼを超えて: ジェントリフィケーション、立ち退き、アンホームिंगの暴力性」
(Elliott-Cooper et al., 2019)

この 5 つのレビュー論文に関して特に注目すべき点は以下の 3 点が共通していることである。第一に、いずれの論考もジェントリフィケーションの研究史の中では比較的新しく 2018 年と 2019 年という短期間に集中的に発表されている。第二に、いずれの論考においてもジェントリフィケーションによる立ち退きの類型化を行った Peter Marcuse の研究 (Marcuse, 1985; 1986) ¹⁾ に言及されている。第三に、すべての表題にジェントリフィケーションと立ち退きの両方が含まれている。そしてこの 3 つの共通点はジェントリフィケ

ーション研究の現在地やジェントリフィケーション研究という枠組みの中で重要視されていることを示している。

まず第一と第二の共通点が示しているのはジェントリフィケーション研究の現在地と立ち退きへのアプローチにおける Marcuse の研究の重要性である。Ruth Glass がロンドンを事例として「gentrification」という用語を生み出したのは1964年であったが、それから50年以上が経過した2018年・2019年現在でもジェントリフィケーション関連の研究が集中的にレビューされている。それはつまり、ジェントリフィケーション研究という研究領域においては依然として新たな研究成果の蓄積が続いており、多くの発展性が見出されていることを示している。また Marcuse がニューヨークを事例として立ち退きを4つに類型化したのは1985年であったが、それから30年以上が経過してもなおジェントリフィケーション研究の枠組みの中で Marcuse による類型化が参照されている。これはジェントリフィケーションによる立ち退きの検討において、ひいてはジェントリフィケーション研究全体において Marcuse による立ち退きの類型化を参照することが依然として重要視されていることを示している。そして三点目の共通点である表題にジェントリフィケーションと立ち退きの両方が含まれているという点は、いずれの論考でもジェントリフィケーション研究という共通の文脈において立ち退きの位置づけやジェントリフィケーションと立ち退きの関係性が中心的に問われていることを示している。

本稿ではこうした最新のレビュー論文に見出すことができる共通点や論点の中でも特に Marcuse による立ち退きの類型化が参照されていること、そしてジェントリフィケーションと立ち退きの関係性が問われていることに焦点を当てる。その上でジェントリフィケーション研究という文脈において立ち退きがどのように位置づけられており、立ち退きについて論じられる中でどの

ようなかたちで Marcuse による立ち退きの類型化が参照され応用されているのかという点を重点的に検討する。さらにそうした立ち退きの位置づけや Marcuse を参照する意義に加えて、ジェントリフィケーションによる立ち退きを的確に捉えていく上で必要となる新たな視点やアプローチの確認も行いながら、ジェントリフィケーション研究の文脈においてジェントリフィケーションによる立ち退きがいかに捉えられてきたのか、そして今後立ち退きをいかに捉えていくべきかという点について検討したい。

なお後述するようにジェントリフィケーションによって引き起こされる立ち退きを検討する上ではジェントリフィケーションという現象の輪郭を明確にする必要がある。そのため次節以降の構成としてまずは先行研究において提示されているジェントリフィケーションの定義の整理を行い、ジェントリフィケーションの性質や定義の多様化を確認した上でジェントリフィケーションの定義における立ち退きの位置づけについて検討する。その際、ジェントリフィケーションや立ち退きの問題性に関する議論を展開し Marcuse を参照する意義について述べている Tom Slater の主張を確認する(2節)。そして本稿の冒頭で列挙した5つの論考や Slater らによって参照されている Marcuse による立ち退きの類型化の内容を確認し、放棄 abandonment、ジェントリフィケーション、立ち退きの関連性について論じる中で Marcuse がジェントリフィケーションと立ち退きの関係性をいかに捉えていたのかという点を明らかにする(3節)。次に先行研究や先述の5つの論文を参照しながら、ジェントリフィケーション研究においてどのように Marcuse の類型化が応用され、さらにジェントリフィケーションによる立ち退きの分析に関してどういった新たな視点やアプローチが提示されているのかということを確認する(4節)。そして最後に本稿全体の内容を踏まえてジェントリフィケーション研究という枠組

みの中でジェントリフィケーションによる立ち退きをいかに把握し、いかに位置づけるべきかという点について検討する(5節)。

2. ジェントリフィケーションの定義と立ち退き

2-1. ジェントリフィケーションの中心的要素

立ち退きに関する議論に先立って本項ではまずジェントリフィケーションに焦点をあて、先行研究で提示されているジェントリフィケーションの中心的要素や定義を概観し、ジェントリフィケーションという現象の輪郭を明らかにする。周知の通り「gentrification」という用語は1964年にRuth Glassによって生み出され、この用語が初めて使用されたGlass(1964)の文章(表1)はジェントリフィケーションの古典的な定義を示す文章としてこれまで数多くの先行研究で引用されてきた²⁾。そしてこの文章に示されている通りGlassは古い住宅ストックの改修、賃貸から自己所有へのテニユア(tenure=住宅の所有もしくは契約の形態)の変化、不動産価値の上昇、ミドルクラスの流入に伴う労働者階級住民の立ち退き、これらを含む複雑な都市的過程としてジェントリフィケーションを捉えた(Lees et al., 2008)。

これらの4点がGlassの定義の中心的要素であるが、この4点を変化の内容に着目して分類し直すと、Glassによって把握されたのは空間(住宅)、空間の用途や価値(テニユアや不動産価値)、社会集団(住民)の3つの要素の変化であったと解釈することができる。そのためGlassが定義の最後で言及している「地域の社会的性格」というのはこの3つの要素によって構成されるものとして捉えることができる。そしてさらにGlassの定義でも示されている通りジェントリフィケーションの過程というのは上記の3つの要素によって構成される「地域の社会的性格」の単なる変化ではなく、上級化、高級化、アップグレード、ステータスや価値の上昇等、社会的性格の上方的な変化に注目して把握されている。よってGlassが提示した定

義に依拠しつつその中心的要素を分類し直した場合、ジェントリフィケーションという現象は改修等による空間自体の質的向上、より高価値な用途への転換や不動産価値の上昇、社会集団の社会的・職業的地位の上級化等によって空間、空間の用途や価値、社会集団の3つの要素がそれぞれもしくは全体的に上方的に変化し、地域の社会的性格が変化していく過程として再定義することができる。

ただし表1で示したGlassの定義はあくまでも1960年代のロンドンを事例とした文脈でつくり出されたものであり、その後約50年のあいだにジェントリフィケーションに関する数多くの研究が蓄積されている。そしてそうした研究においてはジェントリフィケーションの定義や現象の説明に含めるべき様々な要素が提示されていることに留意しなければならない(表1)。その中でも重要となるのはジェントリフィケーションの中心的要素である空間、空間の用途や価値、社会集団の上方的変化が当初Glassによって想定されていた空間(古びてみずばらしい家屋、ヴィクトリア様式の住宅)や社会集団(ミドルクラスや労働者階級)よりも多様化し、包括的・抽象的な概念を用いて説明されていることである。

例えばWarde(1991)、Atkinson(2003)、Davidson and Lees(2005)の指摘を確認した場合、空間やその用途・価値の変化に関しては再投資による建造環境や景観の変化が、そして社会集団の変化に関しては所得や階級の差異に根差した住民構成や居住パターンの変化がジェントリフィケーションの説明の中で言及されている。またLees et al.(2016)やJackson and Butler(2019)、そして後述するCocola-Gant(2019)にも引用されているClark(2005)の定義においては社会集団として土地利用者land-userが想定されており、空間の変化も「建造環境の変化」として説明されている。

さらにジェントリフィケーションが発生する空間として想定される空間も多様化しており、例え

表1 ジェントリフィケーションの定義や中心的要素を示す研究例

ジェントリフィケーションの古典的定義		
Glass (1964)	「上流下流を含むミドルクラスがロンドンの多くの労働者階級地域に徐々に侵入しつつある。上下階に各2部屋をもつ古びてみすばらしい家屋は、賃貸契約が終了すると買収され、エレガントで高級な住宅へと生まれ変わっている。下宿屋や多世帯用住宅として利用されてきた広々としたヴィクトリア様式の住宅には、以前から価値が下がっていたものもあればここ最近になって価値が上がったものもあるが、そうしたヴィクトリア様式の住宅が再びアップグレードされている。今ではその多くが高級フラットや「ハウスレット」(今時の不動産屋が少々気取って使う業界用語)として小分けにして分譲されている。そしてこのような住宅の近年の社会的なステータスや価値は物件の大きさに反比例していることが多く、地域の以前の水準と比較するとそうしたステータスや価値は著しく上昇している。こうした「ジェントリフィケーション」の過程がひとたびある地域で始めると、元々そこで暮らしていた労働者階級の住民のすべてあるいはその大半を立ち退かせるまでその過程は急速に進行し、当該地域の社会的性格を全体的に変容させるのである。」(Glass, 1964: xviii-xix 頁。引用文中の強調は筆者による。)	
ジェントリフィケーションの説明に必要な要素や事象を示している研究例		
Warde (1991)	<ul style="list-style-type: none"> ・住民の居住パターンの変化 ・建造環境の変化 ・階級に根差した特定の消費嗜好をもった人びとの集住 ・不動産の価値やシステムに関連する経済的再編 	
Atkinson (2003)	<ul style="list-style-type: none"> ・安価な居住地域の階級に根差した植民地化 ・物理的な住宅ストックに対する再投資 	
Davidson and Lees (2005)	<ul style="list-style-type: none"> ・資本の再投資 ・高所得者層の流入に伴う地域の社会的性格の上方的変容 ・景観の変容 ・低所得者層の直接的な立ち退きもしくは間接的な立ち退き 	
Clark (2005)	「ジェントリフィケーションとは、従前の土地利用者よりも社会的地位や経済的地位の高い新規の土地利用者の人口移動の一過程であり、それは固定資本への再投資による建造環境の変化を伴って生起する。特に新規土地利用者が有する力が大きければ大きいほど、建造環境において付帯的に生じる変化もより大きくなると考えられ、それゆえに従前の土地利用者と新規土地利用者とのあいだで社会的地位や経済的地位の差が大きければ大きいほど、このジェントリフィケーションの過程は一層明瞭に発現することになる。どこでということとは問題ではなく、いつにということも問題ではない。ここでの叙述内容に合致するのであれば、いかなる変化の過程もジェントリフィケーションであると考えることができる。」(Clark, 2005: 258 頁。引用文中の強調は筆者による。)	
住宅以外の空間におけるジェントリフィケーションの把握の必要性を示唆する研究例や定義		
Neil Smith	(1982)	「ミドルクラスの住宅購入者、家主、専門的ディベロッパーによって労働者階級の居住地域が改修される過程」(Smith, 1982: 139 頁)
	(1996)	<ul style="list-style-type: none"> ・住宅だけではなく再開発や観光空間、消費空間、オフィス等も含みうる。 ・「都市中心部の景観の階級的改造」(Smith, 1996: 37 頁)
Hamnett and Whitelegg (2007)	ジェントリフィケーションの発生場所は古いオフィスビルや工場、学校、病院を含む多種多様な不動産に広がっている。	

(出典) 表中の各文献の内容をもとに筆者作成。

ば地代格差論について論じた Neil Smith は 1980 年代には「ミドルクラスの住宅購入者、家主、専門的ディベロッパーによって労働者階級の居住地域が改修される過程」(Smith, 1982: 139 頁)としてジェントリフィケーションを定義していた。しかし 1990 年代には住宅以外の空間(観光空間、消費空間、オフィス等)においてもジェントリフィケーションを把握することが可能であると指摘しており、ジェントリフィケーションを都市中心部の景観の階級的改造として再定義している(Smith, 1996)。またロンドン都心部のジェントリフィケーションについて論じた Hamnett and Whitelegg (2007) も、ジェントリフィケーションが発生する空間にはオフィスビルや工場、学校、病院などあらゆる不動産が含まれるということを指摘している。

このように Glass によるジェントリフィケーションの定義以降、住宅の改修、住宅以外の空間の変容、テニユアの変化、家賃や不動産価値の上昇、建造環境や景観の変化、階級的改造、高所得者の流入、低所得者の流出もしくは立ち退き等、様々な要素や事象に言及されながら、Glass が当初の想定していた空間や社会集団に限定せずにより包括的・抽象的な概念をもってジェントリフィケーションが説明されるようになっていく。

しかしながら、論者によってジェントリフィケーションの説明に含められる要素や事象、概念が異なっているとは言え、そこで言及されているものはいずれも空間、空間の用途や価値、社会集団の上方的な変化に分類することが可能であり、その意味では少なくとも本稿で整理したジェントリフィケーション研究やそこで提示されているジェントリフィケーションの定義は Glass によって把握されたジェントリフィケーションの内容からは大きく逸脱はしていない。よってそうした先行研究の定義を確認する限りにおいては基本的には Glass による定義の内容が引き継がれていると判断することができ、その上で本稿の理解に基づく

ならば Glass の定義の中心的要素は空間、空間の用途や価値、社会集団の 3 つの要素に再分類することができるため、様々な要素や事象に言及され包括的・抽象的な概念の使用が見られる中でもジェントリフィケーションの本質というのは空間、空間の用途や価値、社会集団の上方的変容を伴った地域の社会的性格の変化に求めることができる。

2-2. ジェントリフィケーションの批判的検討

ここまでの議論を踏まえた上で続いてはジェントリフィケーションと立ち退きの関係性に関する検討に進む。前項で述べた通り社会集団は地域の社会的性格を構成する主要な要素の一つであり、ジェントリフィケーションの過程を説明する上ではその社会集団の変化、すなわち社会集団の社会的・職業的地位の上級化に言及することが重要となっている。そして立ち退きはその社会集団の社会的・職業的地位の上級化の一端として位置づけられる事象であり、立ち退きという用語を用いてジェントリフィケーションを定義している例としては前項で触れた Glass (1964) や Davidson and Lees (2005) を挙げるができる。さらに本稿でもレビューの対象としている Cocola-Gant (2019) は、ジェントリフィケーションの進行下における政府や新自由主義的な都市政策の役割について検討する中でジェントリフィケーションの定義にも言及している。その際彼は Glass の定義や Lees et al. (2008) によるジェントリフィケーションを「地域における階級的不平等の発現」(80 頁)として捉える視点を参照しながら、次にようにジェントリフィケーションの定義と立ち退きの位置づけについて述べている。

ジェントリフィケーションは、労働者階級の住民がミドルクラスによって立ち退かされ住宅や商業空間の景観がアップグレードされる社会的・空間的な変化の過程である。そしていかなるジェントリフィケーションの定義において

も住民の立ち退きが本質的要素として前提とされていることは注目に値する。つまり立ち退きを伴うことのないジェントリフィケーションなど存在していないのである。…中略… ジェントリフィケーションはインナーシティの放棄や物理的衰退、それに続く都市再生過程と関連づけて考える必要がある。(Cocola-Gant, 2019: 298 頁。引用文中の強調は筆者による。)

このように Cocola-Gant (2019) はジェントリフィケーションの定義において立ち退きが「本質的要素として前提とされている」と理解しており、ジェントリフィケーションの定義における立ち退きの重要性を強調している。なお、こうしたかたちで Glass による古典的定義に立ち返り、そこから「階級的不平等」への問題意識を汲み取った上でジェントリフィケーションにおける立ち退きの位置づけを強調する立場や、Cocola-Gant (2019) を含む冒頭で列挙した 5 つのレビュー論文でも行われるようにジェントリフィケーションと立ち退きの関係性について論じる中で Marcuse による立ち退きの類型化を理論的な土台とするロジックというのは Tom Slater によって先鋭化されてきた。

Slater は 2000 年代の一連の研究 (Slater et al., 2004; Slater, 2006; 2009) においてジェントリフィケーションに対する批判的アプローチについて検討しており、彼がその一連の研究で提示した主張は大きく以下の 3 点に要約することができる。

- I) 1980 年代中葉を境にジェントリフィケーションに対する批判的アプローチが背景に退き、ジェントリフィケーションを肯定的に評価する言説や研究が台頭するようになった。
- II) ジェントリフィケーションの影響を受ける社会集団 (労働者階級や低所得者層) ではなく、ジェントリフィケーションの原因やそれを牽引する社会集団 (主にミドルクラス) に

注目されるようになった。

- III) ジェントリフィケーションや立ち退きに対する批判的アプローチを取り戻す必要があり、社会的正義や「都市への権利」の問題を前景化する上では Marcuse の議論を理解しなければならない。

(I) と (II) は共にジェントリフィケーション研究の潮流やジェントリフィケーションをめぐる言説に関する指摘であり、(I) の状況の部分的な要因となっているのが (II) の内容である。Slater が特に問題視していたのは、1980 年代前半までの初期のジェントリフィケーション研究においてはジェントリフィケーションの影響に大きな注意が払われ、その中で立ち退きも主要な研究テーマの一つとなっていたが、1980 年代後半以降から彼の一連の研究が発表される 2000 年代までのあいだにそうしたアプローチが大きく後退したことであった。そしてそうした後退の具体的内容として指摘されたのが、ジェントリフィケーションや立ち退きが軽視される一方で、クリエイティブクラスやミドルクラスに注目してジェントリフィケーションを肯定的に評価したり、ジェントリフィケーションが貧困や労働者階級、低所得者層に対して好影響をもたらすと主張しジェントリフィケーションを礼賛するような言説や研究が登場したことであった (Slater et al., 2004; Slater, 2006)。

そしてそうした言説や研究の中でも、ジェントリフィケーションに対する批判的視点が欠如し、ジェントリフィケーションがもたらす悪影響や立ち退きを軽視しているものとして繰り返し批判の対象とされているのが Lance Freeman と Chris Hamnett の研究である。前者の Freeman は、ジェントリフィケーションを好影響をもたらす過程として位置づけ直そうとする政策立案者やメディアによって特に 3 つの著作 (Freeman and Braconi, 2004; Freeman, 2005; 2006) が評価さ

れていた。しかしながら、地域を改善しより良いサービスを地域にもたらす効果があるためジェントリフィケーションは促進されるべきであるという主張 (Freeman, 2006) は Slater (2009) によって強く批判されている。一方、後者の Hamnett はイギリスのセンサス (日本の国勢調査に類似) の統計データを用いて、1960年代以降のロンドンにおける職業階層構造の変化 (ミドルクラスの拡大と労働者階級の縮小) を明らかにしている (Hamnett, 2003)。そこで Slater が批判したのは、職業階層構造の変化の中で生じているのは立ち退きではなく入れ替わり replacement であり、立ち退きは無視することができるという Hamnett の主張であった (Slater et al., 2004; Slater, 2009)。

そして Slater はこうした批判を提示した上で上記の (III) に関連することとして、「重要であるのは (ジェントリフィケーションの) 定義には分析における使用と政治的文脈での使用の両方が含まれており、ジェントリフィケーションに関するあらゆる検討においては階級の不平等がその最前線に位置していることである」 (Slater, 2009: 295 頁。補足は筆者による) と述べ、ジェントリフィケーションや立ち退きに関する議論の中で社会的正義の問題を問うことの必要性を強調している。そこで Slater (2009) が拠り所としたのが Marcuse であり、Slater は「ジェントリフィケーションと立ち退きに関する研究への Peter Marcuse の貢献は計り知れず」 (293 頁)、Marcuse の所論を読み返し理解することによってジェントリフィケーション研究という枠組みの中で社会的正義の問題を前景化することや「都市への権利」を取り戻すための政治的な対抗にも結び付くと主張している。

このように一連の研究の中で Slater はジェントリフィケーションによる立ち退きを軽視する立場に対して一貫して批判的な態度を示しており、ジェントリフィケーションが階級的な不平等を内包

する現象であることから、ジェントリフィケーションやそれによる立ち退きは社会的正義や「都市への権利」の問題を踏まえて検討されなければならないと述べている。そして Slater はそうした検討の思想的、理論的、方法論的土台として Marcuse によるジェントリフィケーションと立ち退きへのアプローチを参照すべきであると主張したのであった。そこで次節ではこうした Slater の意見を踏まえた上で Slater を筆頭として多くの研究³⁾において幅広く参照されている Marcuse をとり上げ、特に Marcuse による立ち退きの類型化を重点的に整理しながらジェントリフィケーションと立ち退きの関係性について検討を行う。

3. Marcuse による立ち退きの類型化

3-1. 放棄、ジェントリフィケーション、立ち退き

Marcuse はニューヨークを事例として不動産物件の放棄、ジェントリフィケーション、立ち退きの関係性について論じる中で、ジェントリフィケーションによって引き起こされる4種類の立ち退き、すなわち、「最後の居住者に対する直接的な立ち退き direct last-resident displacement」、「連鎖的に進行する直接的な立ち退き direct chain displacement」、「排他的な立ち退き exclusionary displacement」、「立ち退きの圧力 displacement pressure」の4つを提示した。本節ではこの Marcuse による立ち退きの類型化の内容を確認するが、「放棄とジェントリフィケーションは対極にある」 (Marcuse, 1985: 195 頁) という言葉から論考が始められているように、Marcuse の議論においては放棄とジェントリフィケーションの関係性の検討が主軸とされている。そのため本節ではまず4種類の立ち退きが提示されるに至るまでの議論の展開を確認する。

Marcuse が分析の起点として位置づけたのは2つの正反対の性質をもつ現象、すなわち、需要の減少や不動産価値の急激な低下の後に生じる放棄と、需要の増大や不動産価値の急激な上昇を示す

表2 放棄、ジェントリフィケーション、立ち退きに関する説明および政策的前提

放棄	
政策的 前提	<ul style="list-style-type: none"> ・放棄は痛手ではあるが避けることはできない。 ・公共政策にできることはせいぜいある地域における放棄を制限することくらいである。 ・優先順位を決め特定の地域を救済し、別の地域を完全に放棄することが不可欠である。
<p>【Marcuse による放棄の説明】 「ある物件を介して私的に経済的利益を獲得している人が、当該物件の継続的な利用や再利用を目的とした実質的な需要が減少したために当該物件の所有権を維持する意思を捨て、補償のないかたちでの所有権の放棄を厭わなくなった時、その物件の放棄が発生する。」(199-200 頁より引用)</p>	
ジェントリフィケーション	
政策的 前提	<ul style="list-style-type: none"> ・住宅の質や課税標準の向上に貢献し民間主導による都市内の再活性化を促す。 ・ジェントリフィケーションが引き起こす立ち退きは些細なことである。 ・税制優遇、区画変更等、あらゆる手段を講じてジェントリフィケーションを勢いづける政策を実行すべきである。
<p>【Marcuse によるジェントリフィケーションの定義】 「コミュニティ全体や広域地域全体でも人口構成の変化は生じるものの、そうした一般的水準での変化とは大きく異なり、古びて様々な状況が悪化していたインナーシティの住宅において空間的に集中したかたちで新住民——その多くが高学歴・高収入、若年世代、白人、専門職・管理職従事者である——と旧住民——その多くが低所得、労働者階級、貧困状態で、マイノリティやエスニック集団に属していたり高齢である——が入れ替わる際にジェントリフィケーションは発生する。」(198-199 頁より引用)</p>	
ジェントリフィケーションによる放棄への対処および立ち退き問題	
政策的 前提	<ul style="list-style-type: none"> ・ジェントリフィケーションは放棄に対する唯一の現実的な解決策である。 ・特に財政的圧迫に見舞われている時代にあつては公的セクターだけでは放棄に対処することは難しいため、民間セクターの資源をフル活用することのみが対処の道である。 ・したがって、放棄された地域におけるジェントリフィケーションは大変望ましい。
<p>【放棄、ジェントリフィケーション、立ち退きの関係性に対する Marcuse の見解】 「ジェントリフィケーションは都市内の他の地域から高所得世帯を惹きつけつつ、どこか他の地域での需要を減衰させ放棄の傾向を助長する。加えてジェントリフィケーションは住宅難の深刻化や家賃の上昇を引き起こしながら低所得者層の立ち退きを促進する。放棄とジェントリフィケーションは共に都市経済の変化と直接的に結びついており、さらに都市住民の経済的分断を増幅させるものである。低所得者層は常に立ち退きの圧力にさらされ、高所得者層はジェントリフィケーションが進行した地域内に常に自らを囲い込もうとする。それによって悪循環が生じる。ジェントリフィケーションは放棄に対する解決策には程遠くむしろその過程を一層悪化させている。」(196 頁より引用)</p>	

(出典) Marcuse (1985) の内容をもとに筆者作成。

ジェントリフィケーションという正反対の性質の2つの現象であり、この放棄とジェントリフィケーションがニューヨークにおいて同時に近接して発生している状況であった。そして彼は冒頭において放棄とジェントリフィケーションがそれぞれ政策と密接に関係していることに言及しており、

特に既存の政策において放棄、ジェントリフィケーション、ジェントリフィケーションによる放棄への対処の3点に関して政策的前提として想定されていることを列挙している。その上でそうした政策的前提やそれに基づいて実施される政策に対して問題提起を行うことも研究目的の一つとされ

ている。

彼が提示している放棄とジェントリフィケーションの説明、それぞれに関する政策的前提、そしてジェントリフィケーションによる放棄への対処に関する政策的前提とそれに対する Marcuse の見解を整理したものが表 2 となる。まず放棄が発生する状況としては物件に対する需要の減少と物件を所有する意思の喪失がその誘因であると説明されている。加えて Marcuse は、そうした放棄された物件というのは基本的には物理的な状態から放棄されている状況が確認されるものの、一方では一見すると放棄された状態の物件であっても『塩漬けされている』——再利用が保留されている——(Marcuse, 1985: 200 頁) 可能性があるということにも言及している。そしてそうした放棄が多く物件に広がり行政や民間企業からの投資が引き揚げられると地域全体で放棄が発生し、それがやがて放棄された物件の住民の立ち退き、ひいては放棄された地域からの立ち退きへとつながると説明されている。

Marcuse によるジェントリフィケーションの定義においては、老朽化や荒廃がみられるインナーシティがジェントリフィケーションの発生する空間として捉えられており、そこで「空間的に集中したかたちで」新住民と旧住民が入り替わることによってジェントリフィケーションが発生すると考えられている。なお彼の定義においては立ち退きではなく入れ替わりという用語が用いられているが、表 2 中の「放棄、ジェントリフィケーション、立ち退きの関係性に対する Marcuse の見解」でも確認できるようにジェントリフィケーションによって家賃の上昇や低所得者層の立ち退きが助長されることが指摘されている。よってそうした点を踏まえると、Marcuse のジェントリフィケーションの定義においてはインナーシティ、住民の入れ替わり、低所得者層の立ち退き、家賃の上昇がジェントリフィケーションの中心的な要素として位置づけられていると理解することができ

る。

3-2. 立ち退きの 4 類型

Marcuse は放棄とジェントリフィケーションが並行して発生する状況を前提として立ち退きを捉えているということを確認したが、Marcuse はそうした視点を前提とした上で立ち退きを最後の居住者に対する直接的な立ち退き、連鎖的に進行する直接的な立ち退き、排他的な立ち退き、立ち退きの圧力の 4 種類に分類し、この 4 種類の立ち退きを想定しながらその影響について考える必要があると述べている (表 3)。

まず Marcuse は立ち退きの分類に際して Grier and Grier (1978) によって示された定義を参照している。Grier and Grier (1978) は、住居の状態やそれを取り巻く様々な周辺環境が居住者によって制御したり抑止することができない程度にまで大きく変化し、さらに居住者が住居の占有条件を満たしているにもかかわらず手の届かない家賃設定などによって継続的な占有が不可能な状況に追い込まれることで非自発的な転居が生じるとし、そうした非自発的な転居を立ち退きとして定義した。

Marcuse はこの Grier and Grier (1978) の定義は「直接的な立ち退き direct displacement」の異なる 2 つの形態、すなわち、生活インフラの意図的な停止や破壊といった直接的な物理的手段によって引き起こされる物理的な立ち退きと、家賃の引き上げといった直接的な経済的圧力によって引き起こされる経済的な立ち退きという 2 つの形態の立ち退きを包含するものとして捉えた。そして Marcuse はこの直接的な立ち退きの過程に関してその一連の過程を構成する 2 つの段階に注目し、それぞれの段階において立ち退かされる居住者の数の把握に主眼を置いて最後の居住者に対する直接的な立ち退きと連鎖的に進行する直接的な立ち退きの 2 つに分類した。

この 2 つの立ち退きは共に直接的な物理的手段や経済的圧力によって強いられる立ち退きを表す

表3 Marcuseによる立ち退きの類型化

立ち退きの類型		内容
直接的な立ち退き	最後の居住者の立ち退き	物理的手段（例えば家主による建物内の暖房の停止）や経済的圧力（家賃の引き上げ）の影響によって生じる立ち退き。立ち退きの一連の過程の中でもその最終的な局面に直面している居住者に注目して把握される。
	連鎖的な立ち退き	「最後の居住者」だけでなく、建物の劣化や家賃の上昇といった影響を受け比較的早い段階で立ち退かされた居住者をも把握の対象に含め、長期的な進行過程を踏まえて把握される立ち退き。
間接的な立ち退き	排他的な立ち退き	前住の居住者が物件を明け渡した後にジェントリフィケーションが発生したり当該物件が放棄されることによって新規居住者の入居が排他的に抑止される状況を指す。
	立ち退きの圧力	社会関係、消費空間、社会インフラなどの変化を伴った地域変容によって立ち退きの圧力が高まっている状況。この立ち退きの圧力の高まりは、低所得者層の剥奪状況が深刻化している状況として捉えることができる。

（出典）Marcuse (1985) および Marcuse (1985) の類型化を整理している Slater (2009)、Davidson and Lees (2010)、Zhang and He (2018)、Easton et al. (2019) の内容を参照し筆者が作成。

が、前者は立ち退きの一連の過程の中でもその最終的な局面に直面している居住者（＝最後の居住者）に注目して把握される立ち退きである。一方、後者はより長い時間軸で立ち退きの過程を捉え、立ち退きの最後の局面だけではなくそれ以前の早い段階において立ち退かされた既に転居済みの居住者も含めるかたちで把握される。Marcuse は物理的な立ち退きと経済的な立ち退きを含む直接的な立ち退きは「長期的な移行の文脈の中で漸進的に生じる」(Elliott-Cooper et al., 2019: 5 頁) と捉え、立ち退きの内容の違いというよりはその漸進的な過程の中で、最後の段階に着目するのか、それともより長い時間軸で捉えるのかという視点の違いに基づいて直接的な立ち退きを最後の居住者に対する直接的な立ち退きと連鎖的に進行する直接的な立ち退きの 2 つに分類したのであった。

そして立ち退きの内容の違いに重点が置かれ、直接的な立ち退きと大きく性格が異なるものとし

て分類されているのが排他的な立ち退きと立ち退きの圧力の 2 つを含む「間接的な立ち退き indirect displacement」である。この間接的な立ち退きは直接的な物理的手段や経済的圧力によって強いられた立ち退きではなく、住居を取り巻く環境の変化等、間接的な影響によって強いられた立ち退きを指している。排他的な立ち退きは、ある住宅物件において前住の居住者が物件を明け渡した後にジェントリフィケーションが発生したり当該物件が放棄されることによって新規世帯の入居が排他的に抑止される状況を指している。この排他的な立ち退きは特定の物件そのものの変化によって生じるものであるが、もう一方の立ち退きの圧力はより広い周辺環境の変化によって立ち退きの圧力が高まっている状況を指している。そして Marcuse は立ち退きの圧力の高まりを示す具体的状況を次のように説明している。

ある家族が自らを取り巻く地域の劇的な変化を目の当たりにした時、その家族が親しくしていた友人らが地域を去っていった時、その家族が最真にしていた店舗が閉店に追い込まれ、他の顧客を相手にする新しい店舗がそうした店舗と入れ替わったとき、そして公共施設、交通システム、支援サービスにおける変化によって明らかにその地域の活力が失われ始めた時、立ち退きの圧力は大きくなっている。(Marcuse, 1985: 207 頁)

この一文で示されている通り、立ち退きの圧力が高まっている状況というのは社会関係、消費空間、社会インフラなど幅広い局面で見受けられる周辺環境の変化から把握されている。つまりこの立ち退きの圧力を含め Marcuse によって間接的な立ち退きという概念が提示されたことによって、直接的な立ち退きが生じていない状況であっても周辺環境の変化によって結果的に立ち退きの発生につながっている場合には、そうした周辺環境の変化も一種の立ち退きが発生している状況として立ち退きの一形態に含めることが可能となったのであった。

4. 立ち退きの類型化の応用と新たな論点

4-1. 間接的な立ち退きへのアプローチの展開

それでは前節の Marcuse による立ち退きの類型化を踏まえて、本節では先行研究や本稿の冒頭で列挙した5つの論文を参照しながら、ジェントリフィケーション研究においてどのように Marcuse の類型化が応用され、さらにジェントリフィケーションによる立ち退きの分析に関してどういった新たな視点やアプローチが提示されているのかということを確認する。

1 節でも述べた通り冒頭で列挙した5つの論文のすべてにおいて Marcuse による立ち退きの類型化に言及されており、Marcuse によって直接的な立ち退きと間接的な立ち退きが分類され、最後

の居住者に対する直接的な立ち退き、連鎖的に進行する直接的な立ち退き、排他的な立ち退き、立ち退きの圧力の4種類の立ち退きが提示されたことが紹介されている。またこの類型化が果たす役割に関しては、例えば Zhang and He (2018) はこの Marcuse による立ち退きの類型化以降、都市研究においては立ち退きに関する議論が広く展開されるようになったということを指摘している。さらに先述の Slater による Marcuse の意義づけと同様に Cocola-Gant (2019) も Marcuse を参照する重要性について言及している。彼は立ち退きをめぐってそれを批判的に捉える立場と政策立案者のようにそれを軽視する立場という相反する2つの立場が存在している中で、そうした状況を解消するために立ち退きとは一体何であるのか、立ち退きはいかにして生じるのかということに関心を向ける必要があり、その点を考える上では Marcuse によって提示された立ち退きの概念化を検討することが重要であると述べている。

そして実際に Marcuse による立ち退きの類型化が参照される中で最も広く応用されるようになったのが排他的な立ち退きと立ち退きの圧力を含む間接的な立ち退きであった。Marcuse はインナーシティの住宅を想定しジェントリフィケーションの発生やそれによる立ち退きを検討したが、2 節で指摘した通りジェントリフィケーションが発生している空間として把握対象とされる空間は大きく拡張されつつある。その一例としては商業空間や消費空間において発生する「小売業のジェントリフィケーション retail gentrification」を挙げることができる。González and Dawson (2015) はこの小売業のジェントリフィケーションを、販売品の値上げやテナント賃料の値上げに伴う店舗の場所の変更などによって低所得者層を顧客対象としてきた小売業者がより裕福な顧客を対象とする小売業者にとって代わられる過程として定義している。Hubbard (2017; 2018) はそうした小売業のジェントリフィケーションの検討における重

要な論点として、ジェントリフィケーションの進行に伴って高級志向の店舗が増加することにより労働者階級、エスニックマイノリティ、低所得者層によって日常的に利用され地域に根差してきた店舗が地域から排除されることを挙げている。特にこの Hubbard (2017) の指摘においては地域に根差した店舗が周辺環境の変化に伴って間接的に排除される状況に焦点があてられているため、この小売業のジェントリフィケーションによって間接的な立ち退きを引き起こされていると理解することができる。

また Davidson and Lees (2005; 2010) は「新築のジェントリフィケーション new-build gentrification」によって間接的な立ち退きを引き起こされるということを指摘している。彼らは、かつて発電所や鉄道ヤードとして利用されていたが施設の機能停止などにより長年放棄されていた土地に着目し、そうした放棄されていた土地での新規の共同住宅建設や再開発事業に伴って発生するジェントリフィケーションを新築のジェントリフィケーションとして捉えた。そうした新築のジェントリフィケーションは直接的な居住者の立ち退きを引き起こすことはないものの、周辺地域に暮らす住民が間接的な立ち退きの脅威にさらされる可能性があるということが指摘されている。

同様に Butler et al. (2013) によって間接的な立ち退きの一形態として捉えられているのが「教育での立ち退き educational displacement」である。彼らはジェントリフィケーションの進行に伴って新たに流入してきたミドルクラス世帯の学校選択の対象校が特定の学校に集中し、それによって旧住民世帯が本来有していた通学区域内の学校へのアクセス権が剥奪されている状況を取り上げている。そしてそうしたジェントリフィケーションの進行地域における非ミドルクラス世帯の教育機会や学校選択からの排除が一種の間接的な立ち退きとして捉えられている。

しかし、Marcuse による類型化は依然として高

く評価され応用されているものの、この類型化が 1980 年代のニューヨークの状況に基づいて提示されたものであるという点には留意しなければならない (Zhang and He, 2018; Elliott-Cooper et al., 2019)。この点に関して Elliott-Cooper et al. (2019) は、Marcuse は住宅物件における放棄やジェントリフィケーションを前提として立ち退きを類型化しているが、それでは物理的・経済的側面から立ち退きを捉えているに過ぎず、立ち退きの現象学的側面や情動的側面、立ち退きという経験に内在する怒りや絶望などを理解する上では有効ではないと主張している。そこで彼らは Atkinson (2015) を参照しながらジェントリフィケーションによる立ち退きによってコミュニティやホーム home に対する居住者の帰属意識が暴力的に取り去られる状況に注目し、ジェントリフィケーションによる立ち退きを居住者とコミュニティの繋がりを断ち切る「アンホームング un-homing」の過程として捉える視点を提示している。ジェントリフィケーションによる立ち退きを捉える上では立ち退きが発生するその瞬間だけが重要なのではなく、立ち退きの前、途中、後という一連の過程の段階毎の状況にも目を向ける必要がある (Zhang and He, 2018; Easton et al., 2019)。その点を踏まえると、アンホームングという概念は立ち退きの一連の過程を念頭に置いて提示された概念であり、立ち退きの発生の前後における立ち退かされる人びとのアイデンティティや心理の変化の把握を促す概念であるため、立ち退きの全体像を明らかにする上でも非常に有効性の高い概念であると言える。

なおこの概念を援用して捉えられる具体的状況としては慣れ親しんだ交流場所や店舗の喪失を想定することができる。Zhang and He (2018) や Cocola-Gant (2019) が指摘しているように地域住民が日常的に利用する交流場所や店舗というのは彼ら彼女ら地域住民の交流や連帯のネットワークの構築において非常に重要な役割を果たしてお

り、そうした場所や店舗の存在によって住民らが長年地域に留まることが可能となっている。しかしジェントリフィケーションの進行によってそうした場所や店舗が失われると、住民らはアイデンティティが根差した場所の喪失と向き合いながら新しい社会的ネットワークの再構築に対処しなければならず、彼ら彼女らはフラストレーションや絶望を抱えたままより生きにくい状況へと追い込まれるのである。そうしたアイデンティティが根差した場所がジェントリフィケーションやそれに伴う立ち退きによって喪失することはまさに上記のアンホームングの過程として捉えることができる。

こうした立ち退かされる人びとの心理と密接な関係にあり、さらに社会的正義や「都市への権利」の問題へのアプローチを求めた Slater の指摘にも通じているのが、立ち退きに対して実践される抵抗 *resistance* に関する研究である。この立ち退きへの抵抗に関する研究例としては、例えば Lees and Ferreri (2016) がロンドンの大規模公営住宅の建て替えに伴う「政府主導のジェントリフィケーション *state-led gentrification*」とそれに対する抵抗運動の実態を明らかにしている。彼女らは再入居や転居の補償が不十分な状況の中で立ち退きに直面している団地居住者を対象とし、そうした居住者による抵抗運動が市民団体の組織づくりや敷地内での開放された空間の構築、直接的・間接的な異議申し立てというかたちで実践されたことを報告している。そして Lees and Ferreri (2016) はそうした抵抗運動によって公営住宅の取り壊しを含む再建事業計画の影響（社会住宅やコミュニティ空間の喪失）が可視化され、団地が公益性のあるものとして価値づけられいった過程を明らかにしている。

またジェントリフィケーションや立ち退きへの抵抗という実践が何を意味しているのかという点を検討しているのが Annunziata and Rivas-Alonso (2018) である。彼女らは、範囲や主体、

意図などの点において多面的・批判的に検討されるべき複雑な実践として抵抗を位置づけ、その上で抵抗の分類化を図っている。そして抵抗という実践が多様である状況を踏まえて「抵抗に対して、政治的に意識的で、対抗意識が顕著で、計画的で、可視的な実践が、ジェントリフィケーションによる立ち退きを和らげる唯一の手段というわけではない」ということを主張し、抵抗という実践の中には「日常生活における非政治的で、密かに行われ、意図的ではなく、非公式で、意図的に不可視化された実践」として特徴づけられるものも含まれるということを描き出している (Annunziata and Rivas-Alonso, 2018: 394 頁)。

さらに上記の Sandra Annunziata と Clara Rivas-Alonso に Loretta Lees を加えて論じられた「プラネタリー・ジェントリフィケーションへの抵抗：留まるための闘争におけるサヴァイヴァビリティの重要性」(Lees et al., 2018) においても、そうした実践へのアプローチの必要性が指摘されている。そこで彼女らは、抵抗の実践の一形態として位置づけられる「サヴァイヴァビリティ *survivability*」の概念化に取り組んでいる。このサヴァイヴァビリティに関しては厳密な定義が示されていないが、上記文献の内容からサヴァイヴァビリティという概念は立ち退きに直面している人びとが主体性を持ってその場に留まるために日常生活の中で行っている実践として理解することができる。そして彼女らはこの概念を用いることによって、これまで集合的な抵抗に注目される傾向にあったジェントリフィケーション研究にありふれた日常的な個人的行動へ注目する視点を持ち込むことが可能になると述べている。

4-2. ジェントリフィケーションによる立ち退きをめぐる新たな論点

ここまでは Marcuse による立ち退きの類型化や Slater の問題意識に関連づけて既往研究の内容を整理してきたが、本項ではジェントリフィケ

ーションと立ち退きの関係性やジェントリフィケーション研究における立ち退きの位置づけを考える上で重要となる新たな視点やアプローチを確認する。

まずジェントリフィケーションの過程において重要な要素の一つとして位置づけられる社会集団に関しては職業的キャリアが初期段階の雇用者や新卒の学生を挙げることができる。Zhang and He (2018) が指摘しているように、そうした雇用者や学生は低所得者層やエスニックマイノリティほど社会的剥奪を被ってはいないもののジェントリファイアーや高所得層と比較すると相対的に剥奪されており、その低い経済的・社会的地位によって都市内でジェントリフィケーションが進行する地域から排除されている。彼ら彼女らは購買力に限度がある中で住宅価格の高騰によって望ましくない住宅や地域での生活が余儀なくされており、Zhang and He (2018) は典型的な立ち退かされる人びととジェントリファイアーのあいだに位置づけられる彼ら彼女らのような「サンドイッチクラス sandwich class」(145 頁) にも注目する必要があると述べている。また Zhang and He (2018) は、大規模な金融危機(例: 2008 年のリーマンショック) による住宅の差し押さえや住宅バブルの崩壊(例: 2007 年のアイルランドにおける住宅バブルの崩壊) によって元々ジェントリファイアーの立場であった人びとが「ジェントリフィケーションの『敗者』」(145 頁) となり、立ち退かされる側になったケースにも言及している。

こうしたサンドイッチクラスや元ジェントリファイアーの事例は、ジェントリフィケーションの影響や立ち退かされる社会集団の把握という点に関して重要な視点を提示している。つまり、立ち退かされる社会集団を労働者階級や低所得者層、社会的に周縁化されたエスニックマイノリティなどに限定するのではなく、立ち退きに直面しているのは一体誰であるのかという根本的な問いから立ち退きに直面する個人や社会集団にアプローチ

すべきであるということを示唆している。

他方、ジェントリフィケーションの発生に関してより大きなスケールで当事者となりうるのが政府(中央政府や地方自治体)であり、その政府によって主導される政府主導のジェントリフィケーションに関しても新たな側面から検討され始めている。Zuk et al. (2018) は公共投資(特に鉄道輸送への投資)とジェントリフィケーションの関係性に焦点を当て、都市生活への関心を刺激し都市生活への需要に応じるために行う公共投資(都市再開発、インフラ建設、ゾーニングなど)によって政府はジェントリフィケーションと立ち退きの主体となるリスクを負っているということを指摘している。さらに公共投資によるジェントリフィケーションの発生の可能性を想定できるにもかかわらず、ジェントリフィケーションや立ち退きにおいて公共投資が果たす役割を特定しようとする試みは非常に少なく、特に交通輸送インフラへの投資がジェントリフィケーションと立ち退きに及ぼす影響に焦点をあてた研究はまだ緒に着いたばかりであると指摘されている。

こうした政府の役割や公共投資と関連する状況として Zhang and He (2018) は、立ち退かれた人びとが再定住先において十分に公共投資の恩恵を受けることができている状況に言及している。インナーシティで立ち退きに直面する居住者の多くは同じ地域での再定住が困難であり、交通アクセスが至便ではない家賃の安い地域に分散する傾向にある。しかしそうした地域では公共施設(医療、交通施設、学校など)が未整備であるために既に社会的弱者となっている集団がさらに複合的な剥奪に見舞われるということが指摘されている。

また Elliott-Cooper et al. (2019) が指摘しているように、大規模な公共投資とそれに伴う立ち退きの発生を示す例として都市で開催されるメガイベントも研究対象とされている(2010 年のバンクーバーでの冬季オリンピック、2012 年のロンドンオリンピック、2014 年のグラスゴーでのコモンウ

ェルスゲームズ、リオデジャネイロでの2014年のFIFAワールドカップ、2016年のオリンピック)。Elliott-Cooper et al. (2019)は、スポーツイベントは開催地の周辺に暮らす人びとの健康や経済的状况にとって有益であり、その開催によって国益や社会的インパクトがもたらされると主張されながらも、大会開催前にはそうした恩恵を受けるはずの住民が立ち退かされているということに言及している。こうしたメガイベントの開催に伴って発生するジェントリフィケーションと立ち退きを検討している研究は、今後日本で開催予定となっている2020年の東京オリンピック、2025年の大阪での日本国際博覧会（大阪・関西万博）を検討する上でも参考となる研究例である。

ここまで確認してきたアプローチの多くは定性的研究に分類されるものであるが、ジェントリフィケーションや立ち退きに関する定量的研究に関しても課題や論点が提示されている。この定量的研究を検討する上で重要となるのが、そもそもジェントリフィケーションによる立ち退きを把握すること自体に多くの困難が伴っており、特に統計情報を用いた定量的研究においては多くの制約があるという点である。その点について、ジェントリフィケーションによる立ち退きに関する定量的研究をレビューしているEaston et al. (2019)は、既存の多くの研究で採用されている国家スケールや地方自治体レベルの調査データ（国勢調査に類する公的な調査データ）に言及しており、そうした公的な調査データが抱える大きな問題点として、立ち退きを考える上で重要な立ち退かされた人びとの追跡が難しいということ、そして、立ち退かされた人びとがそうした公的な調査への参加を避ける傾向にあるということを挙げている。また多くの定量的研究においては、立ち退きの把握に際して公的な調査データに含まれる人口移動の統計数値、住宅のテニユアの変化、民族や階級の構成の変化に関する数値に依存しているが、そうした自発的移動と非自発的移動の区別がつかない数値

を利用したとしても意義のある結果はもたらされないということが指摘されている。

そうした点を踏まえて、Easton et al. (2019)は「立ち退きの文脈において最も重要であるのは、空間と時間を横断して個人を追跡することができるデータソースにアクセスすること」（15頁）であると主張している。そこで公的な調査に基づく統計情報や立ち退かされた人びとに関する情報の制約や限界を克服する手段として彼女らが有効性を指摘しているのが「データの渉猟」という手段、すなわち、ソーシャルメディアや参加型の調査形式から得られたビッグデータの活用である。不特定多数の人びとから大量の発言や記述、個人情報、位置情報を収集することができるという点や日常の経験に則したリアルタイムでの情報の獲得という点から考えると、少なくとも公的な調査のデータに頼ることよりもこの手法は有効性が高い。しかしそうしたビッグデータの収集や利用に際しては膨大な個人情報へのアクセスという点に大きな倫理的課題があるため、「データ正義 data justice」（Easton et al., 2019: 16頁）を十分に検討した上で実施されなければならない。

5. ジェントリフィケーション研究において立ち退きをいかに捉えるべきか

本稿ではまずジェントリフィケーションの定義に焦点を当てジェントリフィケーションの輪郭を明らかにし、その上でジェントリフィケーションの定義やジェントリフィケーション研究において立ち退きがどのように位置づけられているのかということを確認した。ジェントリフィケーションの定義に関してはGlassによるジェントリフィケーションの定義を参照しつつもその中心的要素を分類し直し、空間、空間の用途や価値、社会集団の3つの要素がそれぞれもしくは全体的に上方的に変化し、地域の社会的性格が変化していく過程としてジェントリフィケーションを再定義した。

そして先行研究を検討した結果、ジェントリフ

イケーションの中心的要素は当初 Glass によって想定されていた空間や社会集団よりも多様化し、包括的・抽象的な概念を用いて説明されていることを明らかにすることができた。しかしそうした先行研究で言及されている多種多様な要素や事象は空間、空間の用途や価値、社会集団のいずれかに分類することができるため、本研究においてはジェントリフィケーションという現象の中心的要素はあくまでも空間、空間の用途や価値、社会集団であり、現象の本質はそれら3つの要素の上方的変容を伴った地域の社会的性格の変化であると理解した。よってジェントリフィケーションを中心的要素、本質、定義といった点から考えた場合には、立ち退きというのはジェントリフィケーションという現象を説明する上で言及される諸事象のうちの一つとして理解すべきであり、立ち退きはジェントリフィケーションの中心的要素というよりは、その中心的要素の一つである社会集団の変化、すなわち社会的・職業的地位の上級化の一端として位置づけることが妥当であると判断した。

ただし、既述の通り Glass (1964) や Marcuse (1985) の定義、Davidson and Lees (2005) の指摘においては立ち退きがジェントリフィケーションの中心的要素として位置づけられており、Slater も 2000 年代の一連の研究や Hamnett との論争の中で社会的正義や「都市への権利」を前景化するためにはジェントリフィケーションが内包している階級的不平等の問題に焦点を当てジェントリフィケーションを批判的に検討する必要があると述べている。さらに Slater と同調する意見として Cocola-Gant (2019) のように立ち退きをジェントリフィケーションの本質的要素としてみなす立場も見受けられた。なお、立ち退きの存在を軽視しているという Slater の批判に対して Hamnett (2009) は、民間の賃貸住宅で生じているジェントリフィケーションの結果として労働者階級住民が立ち退かされたり、家賃の高騰によって間接的に立ち退かされた人びとがいるというこ

とを認めつつも、ジェントリフィケーションの論点として重要視しているのはあくまでも社会階層や職業階層構造の変化であり、立ち退きはジェントリフィケーションの原因や帰結として最も重要な要素であるとは言えないと述べている。

この 2000 年代末における Slater と Hamnett による議論は、ジェントリフィケーションの分析や検討において立ち退きを重視する必要があると主張する立場 (Slater) と立ち退き以外の側面に注目している立場 (Hamnett) がそれぞれの観点から重視すべき点を指摘することに終始しており、議論の中で最も重要なジェントリフィケーション研究において立ち退きをいかに捉えるべきかという点や立ち退きを重視すべきであるのか否かといった点に関しては双方の主張が噛み合っておらず明確な結論が導き出されることはなかった。

本稿ではジェントリフィケーションの中心的要素、本質、定義から考えた場合には立ち退きはジェントリフィケーションという現象を説明する上で言及される諸事象のうちの一つに過ぎないと述べたが、この見解は Slater によって批判されたジェントリフィケーションを礼賛したり立ち退きを軽視したりする立場に同調するものではない。というのも、3 節および 4 節を通じて確認してきたようにジェントリフィケーションによる立ち退きについて中心的に論じている研究は数多く蓄積されており、そのように蓄積されてきた研究の内容を検討するとジェントリフィケーション研究の文脈においては立ち退きが重要な論点とされてきたことが明白なためである。

この研究の蓄積という点に関してはとりわけ Marcuse によって提示された最後の居住者に対する直接的な立ち退き、連鎖的に進行する直接的な立ち退き、排他的な立ち退き、立ち退きの圧力の4種類の立ち退きが「ジェントリフィケーションによって引き起こされる立ち退きに関する研究において里程碑とされ」(Elliott-Cooper et al., 2019: 2 頁)、この類型化を援用するかたちで立ち

退きに関する多くの研究が蓄積されてきた。そして排他的な立ち退きと立ち退きの圧力を含む間接的な立ち退きに関しては4節でも確認したように様々な形態のジェントリフィケーションや立ち退きの分析に応用されており、Marcuseによってこの間接的な立ち退きという概念が提示されたことによって立ち退きとして把握される状況が大幅に拡大し、それによってジェントリフィケーションの形態やジェントリフィケーションが発生する空間にも拡張が見られるようになった。

さらに立ち退きそのものの把握から立ち退きの現象学的側面や情動的側面、立ち退きの発生の前後における立ち退かされる人びとのアイデンティティや心理の変化、立ち退きに対して実践される抵抗等の把握にも視野が広がられている。またこうした Marcuse の類型化の応用だけに留まらず、ジェントリフィケーション研究全体における立ち退きへの新たなアプローチとしてサンドイッチクラスや元ジェントリファイアー、公共投資に伴って生じるジェントリフィケーションと立ち退き、定量的研究のアップデートの必要性等も指摘されている。

よって、ジェントリフィケーションの中心的要素、本質、定義から考えた場合には立ち退きはジェントリフィケーションを説明するための事象の一つに過ぎないと考えることが妥当であるが、一方でジェントリフィケーション研究の進展や研究史という側面から考えた場合には、Marcuse の立ち退きの類型化やそれを応用する研究、そして Slater や Cocola-Gant (2019) のような批判的検討等、立ち退きについて中心的に論じている研究が大きな役割を果たしてきたと考えることができる。そこで今後のジェントリフィケーション研究においてもこれまで蓄積されてきた先行研究の内容が十分に検討され、その内容を踏まえた上でジェントリフィケーションによる立ち退きの実態が明らかにされていくことが求められる。

【謝辞】

本研究を進めるにあたって JSPS 特別研究員奨励費（課題番号：18J23295）の一部を利用した。

【注】

- 1) Marcuse は「ジェントリフィケーション、放棄、立ち退き：ニューヨーク市における関係性、原因、政策的応答」（1985年）および「放棄、ジェントリフィケーション、立ち退き：ニューヨーク市における連関」（1986年）の2つの論文において立ち退きを類型化を提示しているが、両論文における立ち退きの類型化に関する内容は重複する部分が多いため、本稿においては発表時期が早かった1985年の論文の内容を参照することとする。そのため、特に注記すべき場合を除いて、本稿における「Marcuse」という表記はすべて Marcuse の1985年の論文を指しており「Marcuse (1985)」と同義である。
- 2) 英語圏の研究における引用例として Hamnett and Williams (1980)、Hamnett (1984; 2003)、Smith (1996)、Butler (2003; 2011)、Atkinson and Bridge (2005)、Davidson and Lees (2005)、Lees et al. (2008; 2016) 等を挙げることができる。
- 3) Slater (2009) に加えて、Atkinson (2000)、Davidson and Lees (2010)、Butler et al. (2013)、そして1節で言及している Zhang and He (2018)、Zuk et al. (2018)、Cocola-Gant (2019)、Easton et al. (2019)、Elliott-Cooper et al. (2019) を挙げることができる。

【参考文献】

- Annunziata, S. and Rivas-Alonso, C. (2018) "Resisting gentrification," In: Lees, L. and Phillips, M.(eds.) *Handbook of Gentrification Studies*, Cheltenham and Northampton: Edward Elgar Publishing, 393-412.
- Atkinson, R. (2000) "Measuring Gentrification and Displacement in Greater London," *Urban Studies*, 37(1), 149-165.
- Atkinson, R. (2003) "Introduction: Misunderstood Saviour or Vengeful Wrecker? The Many Meanings and Problems of Gentrification," *Urban Studies*, 40(12), 2343-2350.
- Atkinson, R. (2015) "Losing One's Place: Narratives of Neighbourhood Change, Market Injustice and Symbolic Displacement," *Housing, Theory and Society*, 32(4), 373-388.
- Atkinson, R. and Bridge, G. (2005) "Introduction," In: Atkinson, R. and Bridge, G. (eds.) *Gentrification in a Global Context: The New Urban Colonialism*, New York and London: Routledge, 1-17.
- Butler, T. (2003) "Living in the Bubble: Gentrification and its 'Others' in North London," *Urban Studies*, 40(12), 2469-2486.
- Butler, T. (2011) "Gentrification in London: Modes of Middle-class Establishment in a Global City," In: Herrmann, H. Keller, C. Neef, R. and Ruhne, R. (eds.) *Die Besonderheit des Städtischen*, Wiesbaden: Springer VS, 265-284.
- Butler, T. Hamnett, C. and Ramsden, M. (2013) "Gentrification, Education and Exclusionary Displacement in East London," *International Journal of Urban and Regional Research*, 37(2), 556-575.
- Clark, E. (2005) "The Order and Simplicity of Gentrification: A Political Challenge," In: Atkinson, R. and Bridge, G. (eds.) *Gentrification in a Global Context: The New Urban Colonialism*, New York and London: Routledge, 256-264.
- Cocola-Gant, A. (2019) "Gentrification and Displacement: Urban Inequality in Cities of Late Capitalism," In: Schwanen, T. and Kempen, R. V. (eds.) *Handbook of Urban Geography*, Cheltenham and Northampton: Edward Elgar, 297-310.
- Davidson, M. and Lees, L. (2005) "New-build 'Gentrification' and London's Riverside Renaissance," *Environment and Planning A*, 37, 1165-1190.
- Davidson, M. and Lees, L. (2010) "New-build Gentrification: Its Histories, Trajectories, and Critical Geographies," *Population, Space and Place*, 16(5), 395-411.
- Easton, S., Lees, L., Hubbard, P. and Tate, N. (2019) "Measuring and Mapping Displacement: The Problem of Quantification in the Battle against Gentrification," *Urban Studies*, 1-21.
- Elliott-Cooper, A., Hubbard, P. and Lees, L. (2019) "Moving beyond Marcuse: Gentrification, Displacement and the Violence of Un-homing," *Progress in Human Geography*, 1-18.
- Freeman, L. (2005) "Displacement or Succession? Residential Mobility in Gentrifying Neighborhoods," *Urban Affairs Review*, 40, 463-491.
- Freeman, L. (2006) *There Goes the 'Hood: Views of Gentrification from the Ground Up*, Philadelphia: Temple University Press.

- Freeman, L. and Braconi, F. (2004) "Gentrification and Displacement: New York City in the 1990s," *Journal of the American Planning Association*, 70, 39-52.
- Glass, R. (1964) "Aspects of Change," In: *The Centre for Urban Studies* (ed.) London: Aspects of Change, London: Macgibbon & Kee, xiii-xlii.
- González, S. and Dawson G. (2015) "Traditional Markets under Threat: Why It's Happening and What Can Traders and Campaigners Do," http://trademarketresearch.weebly.com/uploads/4/5/6/7/45677825/traditional_markets_under_threat_full.pdf (2019年11月28日閲覧).
- Grier, G. and Grier, E. (1978) *Urban Displacement: A Reconnaissance*. Bethesda, MD: Grier Foundation.
- Hamnett, C. (1984) "Gentrification and Residential Location Theory: A Review and Assessment," In: Herbert, D. T. and Johnston, R. J. (eds.) *Geography and the Urban Environment: Progress in Research and Applications*, Volume VI, Hoboken: John Wiley & Sons, 283-319.
- Hamnett, C. (2003) "Gentrification and the Middle-class Remaking of Inner London, 1961-2001," *Urban Studies*, 40(12), 2401-2426.
- Hamnett, C. (2009) "The New Mikado? Tom Slater, Gentrification and Displacement," *City*, 13(4), 476-482.
- Hamnett, C. and Whitelegg, D. (2007) "Loft Conversion and Gentrification in London: From Industrial to Postindustrial Land Use," *Environment and Planning A*, 39, 106-124.
- Hamnett, C. and Williams, P. (1980) "Social Change in London: A Study of Gentrification," *Urban Affairs Quarterly*, 15(4), 469-487.
- Hubbard, Phil. (2017) *The Battle for the High Street: Retail Gentrification, Class and Disgust*, London: Palgrave Macmillan.
- Hubbard, P. (2018) "Retail Gentrification," In: Lees, L. and Phillips, M.(eds.) *Handbook of Gentrification Studies*, Cheltenham and Northampton: Edward Elgar Publishing, 294-309.
- Jackson, E. and Butler, T. (2015) "Revisiting 'Social Tectonics': The Middle Classes and Social Mix in Gentrifying Neighbourhoods," *Urban Studies*, 52(13), 2349-2365. (=2019, 松尾卓磨訳『『ソーシャルテクトニクス』を再考する: ジェントリフィケーション地域の間階級とソーシャルミックス』『人文研究』70, 261-288頁)
- Lees, L., Annunziata, S. and Rivas-Alonso, C. (2018) "Resisting Planetary Gentrification: The Value of Survivability in the Fight to Stay Put," *Annals of the American Association of Geographers*, 108(2), 346-355.
- Lees, L. and Ferreri, M. (2016) "Resisting Gentrification on its Final Frontiers: Learning from the Heygate Estate in London (1974-2013)," *Cities*, 57, 14-24.
- Lees, L., Shin, H. B. and Lopez-Morales, E. (2016) *Planetary Gentrification*, Cambridge: Polity Press.
- Lees, L., Slater, T. and Wyly, E. (2008) *Gentrification*, New York and London: Routledge.
- Marcuse, P. (1985) "Gentrification, Abandonment, and Displacement: Connections, Causes, and Policy Responses in New

- York City,” *Journal of Urban and Contemporary Law*, 28, 195-240.
- Marcuse, P. (1986) “Abandonment, Gentrification, and Displacement: The Linkages in New York City,” In: Smith, N. and Williams, P. (eds.) *Gentrification of the City*, London: Allen and Unwin, 153-177.
- Slater, T. (2006) “The Eviction of Critical Perspectives from Gentrification Research,” *International Journal of Urban and Regional Research*, 30(4), 737-757.
- Slater, T. (2008) “A Literal Necessity to be Re-Placed’: A Rejoinder to the Gentrification Debate,” *International Journal of Urban and Regional Research*, 32(1), 212-223.
- Slater, T. (2009) “Missing Marcuse: On Gentrification and Displacement,” *City*, 13(2-3), 293-311.
- Slater, T., Curran, W. and Lees, L. (2004) “Gentrification Research: New Directions and Critical Scholarship. Guest editorial,” *Environment and Planning A*, 36(7), 1141-1150.
- Smith, N. (1982) “Gentrification and Uneven Development,” *Economic Geography*, 58(2), 139-155.
- Smith, N. (1996) *The New Urban Frontier: Gentrification and the Revanchist City*, London and New York: Routledge. (=2014, 原口剛訳『ジェントリフィケーションと報復都市—新たなる都市のフロンティア—』ミネルヴァ書房.)
- Warde, A. (1991) “Gentrification as Consumption: Issues of Class and Gender,” *Environment and Planning D: Society and Space*, 9, 223-232.
- Watt, P. (2009) “Housing Stock Transfers, Regeneration and State-led Gentrification in London,” *Urban Policy and Research*, 27(3), 229-242.
- Watt, P. (2013) “It’s Not for Us’: Regeneration, the 2012 Olympics and the Gentrification of East London,” *City*, 17(1), 99-118.
- Zhang, Z. and He, S. (2018) “Gentrification-induced Displacement,” In: Lees, L. and Phillips, M.(eds.) *Handbook of Gentrification Studies*, Cheltenham and Northampton: Edward Elgar Publishing, 134-151.
- Zuk, M., Bierbaum, A. H., Chapple, K., Gorska, K. and Loukaitou-Sideris, A. (2018) “Gentrification, Displacement, and the Role of Public Investment,” *Journal of Planning Literature*, 33(1), 31-44.

(2019年11月30日受理／2020年2月3日掲載決定)

How should we interpret gentrification-induced displacement?:

Considering definitions of gentrification, Marcuse's categorisation and diversified approaches

Takuma MATSUO

Graduate Student, Osaka City University

Research Fellow of Japan Society for the Promotion of Science

[Key words] Gentrification, Displacement, Indirect Displacement, Displacees, Peter Marcuse

The central question of this paper is how we should interpret gentrification-induced displacement in gentrification research. Firstly, by organizing some definitions of gentrification presented in previous studies, this paper points out an essential feature of gentrification — the upward transformation of the social character of the neighbourhood — and the relationship between gentrification and displacement. Subsequently, based on a discussion on the four types of displacement presented by Peter Marcuse (direct last-resident displacement, direct chain displacement, exclusionary displacement and displacement pressure), it is made clear that Marcuse's categorisation is still important in today's gentrification research. Also, referring to previous studies and five recent review articles published in 2018 and 2019, this paper extracts examples applying Marcuse's categorization, valid viewpoints and approaches for consideration in future gentrification studies.